

愛着障害児の易興奮性についての一考察

大橋 良枝

はじめに

平成二四年の障害児支援制度および平成二五年の学校教育法施行令一部の改正後、知的特別支援学校は以前より広く児童生徒たちを受け入れるようになった。その後、同校では愛着障害児が急増し、教員の指導上の混乱やメンタルヘルスの問題が顕著となった（大橋、二〇一七）。筆者は知的特別支援学校における臨床活動を基盤に、二つのパイロット事例に基づく理論研究からこの状況を説明する理論モデル仮説を生成し、知的特別支援学校における愛着障害児と教師の間起きる問題の力動を描いた（二〇一七、表1、図1）。しかし、このモデル（EMADIS: Educational Model for Attachment Disorders in Special-needs school）において十分触れられていない、今後早急な検討が必要であろうと思われる現象がいくつかある。

その一つが、当該児童生徒の「易興奮性」の問題である。教員からの相談内容の多くに「パニックを起こす子ども」「どこでスイッチが入るかわからない子ども」への対応がわからない、「キレて暴力をふるったり、逃げ出したりする子ども」に振り回されてしまう」という内容のものが多くある。相談を受けた筆者はそれらの子どもの観察を行ってきた

表1：制度改正後に起きた知的特別支援学校の問題状況に対する、EMADIS仮説

<p>第一段階： 投影性同一化機制と、 情緒的連結過程の始 まり</p>	<p>本論に定義された投影性同一化を児童生徒が起こす。その 投影性同一化の対象として選択されたターゲット教師が無 意識的・主体的選択によって情緒的連結過程に組み込まれる。</p>
<p>第二段階： ターゲット教師による 解毒の失敗</p>	<p>ターゲット教師が解毒に成功すれば、児童生徒は再取り入 れ、成長の道をたどるが、失敗すると病的対象関係の反 復に陥り、児童生徒／ターゲット教師の連結が強烈になる ため、教師は教師集団から孤立することになる。</p>
<p>介入： 教師集団内における Container-Contained システム作り</p>	<p>まず、ターゲット教師に蓄積されている攻撃性の排出、解 毒、再取り入れから始める。初期介入時はこれを心理士が 請け負って構わないが、その後ターゲット教師と、彼を取り 囲む教師集団の間に Container-Contained のシステムを作り、 その働きの継続するよう心理士は集団に対して介入す る。</p>
<p>第三段階： 二重の Container- Contained システム の循環</p>	<p>図1に示されたような、ターゲット教師を中止とした二重 の Container-Contained システムが循環することによって、 ターゲット教師の心理的成長、ひいては児童生徒の心理的 成長が起きる。</p>

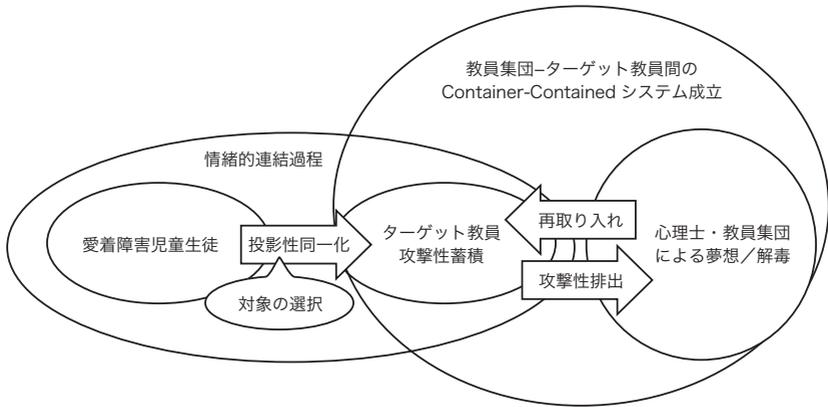


図1：EMADIS仮説図

だが、そこで非常に印象深い現象を目にした。喜びであれ、楽しさであれ、不快感であれ、ある種の感情が高まると閾値が越えたように、快でも不快でもない、いわゆる興奮という状態に陥る子どもたちの様子である。彼らは興奮の渦に巻き込まれると、自動的な暴力行為（ラジカセを投げつける、噛みつく、殴りかかるなど）や奇声、逃走をはじめ、それを止められないように見えた。中には、少し情緒が動く途端にこのような状態に陥る子どももいた。

器質的な問題、すなわち障害が重篤であるほど興奮に伴う行動は突飛なものになるように臨床経験からは感じるが、より目をひいたのは、軽度知的障害であっても愛着の問題のある子どもたちは興奮の問題を顕著に表すという点である。重篤な知的障害を持つ群の示す興奮と愛着障害児のそれが同じ質のものと言つてよいのか、精査が必要ではあるが（現時点では違つて感じている。その違いについては検討が必要であるが）、本論では愛着障害を有する子どもの示す「興奮」の問題に焦点を当てて論考を進めたいと思う。

本稿では暫定的に、以下のような行動上の特徴によつて「易興奮性」を定義しておきたい。それは原因の特定に教師が困難を感じるような突然の泣き、憤怒、止まらないげらげら笑い、咄嗟の攻撃や逃走といった激しい行動、そして、他者からの統制が困難で、また自己コントロールも放棄しているように見える状態で、教時間単位継続するものではなく、五分〜一時間の範囲で概ね収まるが、そのような状態に頻繁（一日一回以上）に陥る状態である。

これは筆者が携つた児童生徒の「易興奮性」を便宜的に定義したものであつて、まだ妥当性の検討が必要であるが、特に自他によるコントロールの難しさが教師にとつて困難を感じる重要なポイントであることは指摘しておく。

そして筆者の現在のところの愛着障害児の易興奮性に関わる精神構造および力動理解は以下のとおりである。筆者（川村、二〇〇九）は「キレる現象／ひきこもる現象」を自己愛空想状態として検討してきたが、その観点からすると、これらの愛着の問題を有する子どもたちは感情を保持する、いわば器のような、安全な空間が精神内界に十分形成されておらず、簡単に情緒があふれ出してしまふのだと理解する。そしてその結果、それは情緒的な意味合いを持たないも

の、いわば反射反応的にエネルギーの暴発を起こしているものと考える。

さて、筆者は一連の研究の中で、知的特別支援学校に愛着障害児が増加しているという現象を検討しているのだが、愛着の問題とこの易興奮性の問題を十分に議論している研究はほとんどない。そのため、筆者はこの現象を捉える包括的理論を持たないまま、自らの重度神経症研究による知見を中心に、いくつかの理論をつなぎ合わせながら試行錯誤的に臨床の場での介入を行ってきた。その経験に基づき本論では、この現象に理論的説明を与える可能性を持ち、臨床的介入を行っていくのに有用であると考えられる理論をいくつか説明することを目的とする。これは今後、この易興奮性に対する臨床的理解と介入方法を見出していくのに益する原理理論を構築していく基盤を示す意義を持つ。

理 論

(一) ブリッジス (Bridges, 1932) の発達理論

この理論は観察研究によつて生後五年の間に急速に分化する情緒を図2のように示したものである。この理論の現場で有用だと感じられた理由は、人生初期に観察される情緒としての興奮が、徐々に分化していく様子を描いていることと、その分化発達の様子が筆者の依拠する精神分析的発達理論との対応性が良かったこと、そして可視化されているために現場の教師たちにとつて受け入れやすいものであったという点にある。

さらに、精神分析的発達理論との対応性が良いということで、精神分析的立場にある筆者としては、精神発達ラインの道筋をこの理論に見出しやすく、介入方法の構成とその結果によつて理解される児童生徒の個人力動のアセスメント

タイプでもない情緒に巻き込まれたような状態、いや、ポジティブな情緒もネガティブな情緒もある閾値を越えるところの興奮という状態に吸収されていくような現象を、日々の臨床の中で観察している筆者にとつて、情緒の分化発達の原因が興奮にあるという理論は合点がいく。情緒の未分化性が愛着障害児の易興奮性に関連があるのではないかという推測が成り立つのである。

(2) 愛着理論

先に筆者は、「キレル／ひきこもる」といった行動上の問題を自己愛空想という概念で検討したことについて示したが、これはウォーリン (Walsh, 2007 邦訳二二五頁) のまとめている、「埋没」(あるいは「ごっこ遊び」の一部も含む) の概念と対応性があると考えている。彼は愛着発達の文脈で精神的発達(あるいは心理療法における発達)を、「埋没」、「メンタライジング」「マインドフルネス」の三位相として描いているのだが、易興奮性の問題を有する群は、「心的等価様式」つまり、内的現実と外的現実が同じものだと感じてしまう未発達な状態の問題を有する埋没の様態に留まっただけで、「ごっこ遊び」すなわち、外的現実を無視し、欲求充足的内的現実に留まる状態の段階に発達できていないか、あるいは埋没からメンタライジングへの道筋である「ごっこ遊び」に留まっただけと考えられる。

さて、前節のブリッジスの情緒分化の理論と愛着理論の対応性についてであるが、情緒の分化発達に母子相互作用が重要な役割を果たすことを示し、さらにウォーリンの言及の下支えとなっているのが、フォナギー (Fonagy) やスターン (Stern) といった臨床家たちである。また彼らの理論に影響を与えている「愛着理論」の母である、エインズワース (Ainsworth et al., 1978) によれば、大橋(二〇一七)でも触れているが、こういった情緒分化には「母子関係における共同的で随伴的コミュニケーション、すなわち安心感を求めて接近する乳児の言語的／非言語的メッセージを正確

に読み取り、よく調和した応答を行う相互のやり取りが必要となる」のである。裏を返せば、このような愛着形成に失敗しているケースは情緒分化に失敗することが予想されるので、そういった群の中に易興奮性を呈する群があると理解できる。

これらの理論から、愛着の問題ゆえに易興奮性を示す子どもたちに対して、大人が新たな愛着対象として関わるのが有効なのではないかという推測が成り立つわけだが、しかし、知的障害と愛着障害を有する児童生徒の様々な要因を考えると、彼らを心理療法的な援助の場に入れることはなかなか難しい。愛着障害児が育った環境を想像すると、おそらく子どもたちを心理学的な援助の場に連れて行こうという親の気持ちも期待するのが難しいし、ましてや知的障害児の臨床心理学的援助における技法上の独特の難しさがある。

こういった知的障害を有する愛着障害児を取り巻く状況を考えると、知的特別支援学校である程度のケアができることが予防的視点からも治療的視点からも有効であると思われる。しかし、学校教育現場で愛着障害児を育てるということについて考えた場合、大橋（二〇一七）が示したように、愛着障害児と無防備に深く関わろうとするときに起きる、投影性同一化による巻き込まれの力動に起因する教師の負担については熟慮する必要がある。

(3) 英国の中間（独立）学派

先述のウォーリンは愛着療法家であるが、彼が述べていた「こっこ遊び」について臨床的に示したのは、ウィニコツト（Winnicott, D. W.）である。

彼はまた、興奮についても言及しており（Winnicott, 1971）、外的対象への依存を撤退させ内在化させる過程、あるいは、創造的な活動（哲学的思考、自由連想）を行うときに起きる独自の現象としての中間領域と遊びの概念を示し

た。中間領域と、そこでの活動である遊ぶことは、絶対依存期から相互依存期の観察によって示された現象で、中間領域とは、外的現実とも精神的現実とも問われない領域であり、その領域が他者と重なることによって遊ぶことが展開し、遊びは興奮を伴うが、本能を巻き込んだ身体的興奮は遊びを損なうこととなる、という点において定義されるものである。

研究ノートということで加筆するが、実は筆者が博士課程に在学中、重度神経症の精神力動に着想した一つのきっかけが、このウイニコットの中間領域と遊びの概念の中にある。健康な空想状態と病的な妄想状態について思考を巡らしていた時の出会いであった。

さて、この中で、本能、すなわち、(原始的な様態である) リビドーあるいはアグレッションが意識されると、遊ぶことや中間領域が損なわれるというのは、現場の児童生徒からもよく感じることであるし、リビドーやアグレッションといったエネルギーには対象(自他含む)志向性があるので、エネルギーが賦活されることで外的対象が意識されて、遊ぶことや中間領域が損なわれるというのは理解しやすい。筆者は、重度神経症の理論においてもこの本能による興奮と遊ぶ喜びの区別の重要性について示唆しているが、この区別に興奮に関わるヒントがありそうな気がしている。

また、同じ中間(独立)学派に位置づけられるフェアバーン(Fairbairn, W. R. D.)もまた、興奮の問題について言及している。シンントン(Syngton, 1986 邦訳三〇頁)によると、フェアバーンは「子どもの愛を受け取ることができない母親、あるいは子どもに自然な愛情を注ぐことができない母親は、奇妙なことに興奮を引き起こします。愛の存在は、子どもに満足の感覚をもたらしますが、愛が欠如している場合には興奮が伴うのです。……情緒的接触が欠如している場合には、憎しみが常に重要な要素として含まれる興奮が存在することになります」と述べている。愛情を注ぐことに失敗した母親によって育てられた子どもが憎しみを要素とする興奮を体験するという言及は、愛着障害の問題と興奮の問題に触れているものではないかと直感的に感じられるものであり、筆者自身、現場で出会った子どもたちの

中にある強い怒りや憎しみの色彩を帯びた突然の暴発行動を思い出さずにはいられないのである。この興奮の概念や、理論の背景に想定される投影性同一化力動を整理することで、愛着障害と興奮の問題、ひいては大橋（二〇一七）で焦点化した投影性同一化力動の問題を統合させていけるのではないかと考える。

また、フェアバーンは彼の「リビドーの究極的な目的は対象である」(Fairbairn, 1958) という言葉からも分かるように、それまでフロイトやクラインによって理論の根幹を支える前提とされていたリビドーとアグレッションの概念を、生物学的な本能的緊張の解放を第一の目的とするのではなく、最初から対象を求めるものとみなしたことから、「もつとも純粋な対象関係論者」と呼ばれる。そして筆者は彼のこの「リビドーの究極的な目的は対象である」という記述に愛着理論との親さを感じる。分離を強調するマラー学派や自我心理学に基づくほかの理論に対し、フェアバーンやウイニコットといった中間学派は愛着に主たる焦点を当て、この発達を相互作用する自他のユニットという視点から理解しようとしている (Fonagy, 2001 邦訳一〇四頁、本文には中間学派ではなく英国対象関係論と記述)。

(4) 折衷について——認識論的観点

話は逸れるが、理論検討の上で認識論の壁とも言うべき問題がこの話の背景にはあると考えるので、研究ノートということで少し自由、場合によっては過度に空想的になるかもしれないが、付記しておきたい。先ほどからの中間（独立）学派という記述も同じ懸念があつての括弧付表記としていることが以下から理解いただければと思う。

大橋（二〇一七）でも少し触れているが、愛着理論の父ボウルビイ (Bowlby, J.) と英国の対象関係論の母クライン (Klein, M.) の決別の歴史から考えてみたい。クラインの徹底した精神内界主義への嫌悪と、彼女が「研究の能力に著しく欠けている」と批判したことに明らかのように、クラインの弟子であつたボウルビイはその関心を精神分析から進

化論・科学性に移していった歴史がある。そして精神分析もボウルビイを排斥していった歴史があるのはよく知られていることである。

しかし、愛着障害児の投影性同一化概念の検討をしていく中で、筆者はボウルビイとクラインが同じ現実に関心を持っていたものの、認識論的な隔たりがあつたために決別したのではないかという疑問に至つた。そうであれば今後愛着理論と精神分析は補完しあう関係になりうるのではないかとすら感じている。

しかし排斥や批難の歴史というのは、その学問が持つ認識論の不一致の歴史であり、その学問の背骨は認識論に寄つて立つわけだから、同じものを見ているのだから折衷、統合していこう、というのは軽率だとも筆者は考えている。

クラインは、筆者の理解だが、徹底した精神内界主義とフロイトの晩年の関心事である死の本能への深い洞察から、娘アナ・フロイトよりもフロイト的であり、精神分析の父フロイトが暗示的に示していることまで加味した論理展開を行つた英国女性であると思われる。その彼女は、フロイトの愛娘でフロイトの著作や書簡を整理し、自我に焦点を当てて自我心理学を展開したアナ・フロイトとの徹底した対立に至り、〈自我心理学〉対〈対象関係論〉（対象関係論というより、クライン派か）の構図が歴史上成立するに至つた。そのような徹底した精神内界主義者であるクラインに師事していたボウルビイもまた、はじめは精神分析の流れの中にいた。しかし、恵まれない環境にある子どもたちの臨床を行つていたボウルビイは、クラインのスーパービジョンを受けながらクラインがその子どもたちの母親に対して関心を持たないことに疑問と憤りを感じ、母子関係への焦点化と精神分析が置き去りにした進化論や科学性（フロイトが関心を持っていた生物学的・進化的・科学的側面とも言えるそれら）に関心を移していったものと筆者は理解している。

さて、英国にはこのような心理学の巨人たちが戦つた歴史があるのだが、英国における対象関係論はその後また面白い展開を見せる。というのも、英国で展開した対象関係論はやはりクラインが母であり、クライン派という言葉もあるのだが、英国対象関係論者の代表とされるビオン (Bion, W.R.) がクライン派かといわれると、そのようには考えない

人も多くいるという現象に表れているように、その後の英国での精神分析の展開は独立的なものとなつていった。ピオンは色濃くクラインの流れを組んではいるが、英国の代表者であるフェアバーンやウニコットなどは自我心理学と対象関係論の対立から比較的離れた第三の位置にあつた。その意味で、彼らは中間学派、独立学派と呼ばれる。この用語は精神分析におけるドグマ的な排斥の歴史からフリーな精神分析の一派が英国にいることを明示している。

おそらく、中間学派と彼らと呼ぶ人たちと、独立学派と呼ぶ人たちの間には、精神分析の中にある歴史に対する認識あるいはその認識に対する価値づけの差があるだろう。その意味では私は、中間学派と呼びたい。なぜなら、愛着理論と精神分析学派は相容れないものと広く考えられている現状の中で、中間学派を媒介に両理論の接点を見出していく可能性があるように感じているからである。ポウルビイも、自分はウニコットから影響を受けたと述べているが、ポウルビイは間違いなくクラインから影響を受けており、しかしそれについて浮かび上がらせるのは第三の位置にいるウニコットらなのではないかと感じるのだ。

少し冗長になつてしまつたが、このような認識を持つて筆者は今後、中間学派を媒介とした理論検討の可能性について考えている。

ここまで筆者が現場で有用であると感じた理論を示してきた。また、少し自由に筆者が感じていることも書き連ねた。一方で、筆者が依拠している自我心理学的立場、精神分析的システムズ理論の視点を示すことは保留し、これらの論を統合する際に用いたいと思う。その前に、それぞれの立場について十分議論していくのが必要であると考えている。

また、この検討の際、ジェイコブソン (Jacobson, E.) について触れることは必須となろう。なぜなら彼女は、内容の難解さからか、あまり日本では表に出てこないが、自我心理学と対象関係論というアナ・フロイトとクラインの対立に端を発した二つの立場の歴史的、認識的違いを押さえた上で、二つの大きな理論を補完させようとした結果、愛着

理論が後で実験的に検証したことをかなり前に理論化していた人物であり、フォナギー (Fonagy, 2001) も愛着理論家がジェイコブソンに学ぶことは大きいと述べている。

おわりに

さて、ここまで興奮とは何かという問いについて、やや保留したままに論を進めてきた。改めて定義を整理することが必要である。その上で事例を置きながら、この興奮が起きる力動とその背景にある発達の問題について今後検討していきたい。また、知的障害を前提とするならば、精神神経的見地からの考察も必須であろう。さらには、この易興奮性の問題、特に激化することについて、これは知的障害の問題と関連があるのか、例えば、統合失調症などの妄想を有するために知的障害はないものの認知機能に影響が起きる疾患では、興奮が同じように起きるのか、もともと知的障害も認知機能の障害も有していない者はどうに興奮を体験し行動かするか、これらの興奮は同じものと言って良いのか、など、疾病単位間の比較検討によって、興奮という行動上の問題の力動理解を深めることも有効だろう。

引用文献

Ainsworth, Mary D., Salter, Mary C., Blehar, Everett Waters, and Sally Wall. *Patterns of attachment: A psychological study of the strange*

situation. Erlbaum, 1978.

Bridges, Katharine M. B., "Emotional development in early infancy." *Child Development* 3 (4), 324-341, 1932.

Fairbairn, W. Ronald D., "On the nature and aims of psycho-analytical treatment." *International Journal of Psychoanalysis* 39, 374-385, 1958.

Fonagy, Peter. *Attachment theory and psychoanalysis*. OtherPress, 2001. (P・フォナギー『愛着理論と精神分析』遠藤利彦・北山修監訳、誠信書房、二〇〇八年)

Yungminton, Neville. *The analytic experience: Lectures from the Tavistock*. Free Association Books, 1986. (N・シンントン『分析の経験——フロイトから対象関係論へ』成田善弘監訳、北村婦美・北村隆人訳、創元社、二〇〇六年)

Wallin, David J. *Attachment in psychotherapy*. The Guilford Press, 2007. (D・J・ウォーリン『愛着と精神療法』津島豊美訳、星和書房、二〇一一年)

Winnicott, Donald W. "The use of an object." *International Journal of Psychoanalysis* 50, 711-716, 1969.

Winnicott, Donald W. *Playing and Reality*. Routledge, 1971.

川村良枝 「人格障害様態を現す重度神経症群の鑑別診断」 国際基督教大学博士論文（未刊行）、二〇〇九年。

大橋良枝 「知的特別支援学校の混乱に対する臨床介入モデルの精神的検討（1）——愛着障害児の投影性同一化と教師の孤立」 『聖学院大学論叢』第三〇巻第一号、二〇一七年、六五—八二頁。

謝辞

本論を含む一連の、知的特別支援学校における愛着障害児と教師の相互作用の問題に関する研究は、JSPS科研費JP17K18664の助成および平成二十九年度文教協会研究助成を受けております。また、研究に協力してくださっている知的特別支援学校教員の皆様方に深い敬意をもって感謝を述べさせていただきます。